

空とぶ船

世界むかし話 ■ ロシア

訳 田中泰子
絵 エヌ・カチエルギン
ヴェー・カナシエーヴィッチ



ほるぷ出版

空とぶ船

世界むかし話 ■ ロシヤ 訳 田中泰子 絵 エヌ・カチエルギン
ヴェー・カナシエー・ウイチ



世界むかし話 6 ロシア 空とぶ船

発 行 昭和54年10月1日 1刷
昭和56年4月1日 2刷

訳 者 田中泰子
画 家 エヌ・カチェルギーン
ヴェー・カナシェーヴィッチ

発行者 中森蒔人
発行所 はるぶ出版
〒160 東京都新宿区新宿2の19の13
電 話 東京(354)7031

印 刷 図書印刷株式会社
製 作 東京連合印刷株式会社

NDC 908 22cm×17cm
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

も
く
じ

雪じいさん	5
働き者のシメオン七人兄弟	15
カマスの命令	29
イワン王子と灰色のオオカミ	44
バーバ・ヤガー	60
皮なめしのニキータ	71
木ぼりのワシ	84
空とぶ船	97
若返りのリンゴと命の水の話	118
ふたりの兄弟	148
水の王のむすめエレナ	162
銅のひたいの大男	183

金持ちになったクジマ……………195

カモの王妃……………209

カエル姫……………221

金の足の王子……………240

タカのフィニスト……………254

気だてのいいエルテ・ベルゲン……………272
(ヤクーチャの話)

勇かなヴァイがどうやって

海をうちまかしたか……………285
(ニエニエーツの話)

豆つぶ勇士の話……………298
(ウクライナの話)

石の王子……………312
(グルジャの話)

日本の子どもたちへ……エヌ・ペー・カルパコーヴァ……………327

雪じいさん

むかし、むかし、年とった百姓ひやくしやうの夫婦ふうふが住すんでいました。おじいさんにもおばあさんにも、ひとりずつ実じつのむすめがありました。おばあさんは、自分のむすめをあまやかし、ねこかわいがりしていましたが、おじいさんのむすめをとことんにくみ、仕事しごとはぜんぶこのむすめにやらせ、なににつけてもこのむすめをのしり、どなり、ろくろく食べものもやりませんでした。

むすめは、いわれたことは、いやといわずに、すべてやり、それも、これいじょうはむりだというくらいに、きちんとしあげました。このむすめのことを見た人はみな、ほめて、ほめて、ほめちぎりました。そして、おばあさんのむすめのこととは、

「なんにもできないなまけ者もののうなしむすめさ！」といいました。

おばあさんは、それですますます意地悪いじわるくののしるようになり、ままむすめを一日じゆ

う、がみがみどなりつけていました。そして、なんとかしてこのむすめを殺してしまいたいと考えていました。

あるとき、おじいさんが町の市場^{いちば}へでかけました。悪^{わる}がしこいおばあさんは、自分のむすめと相談^{そうだん}しました。

「さあ、いまのうちに、あのにくりしいむすめをしまつしちまおう。」

おばあさんは、ままむすめにいいつけました。

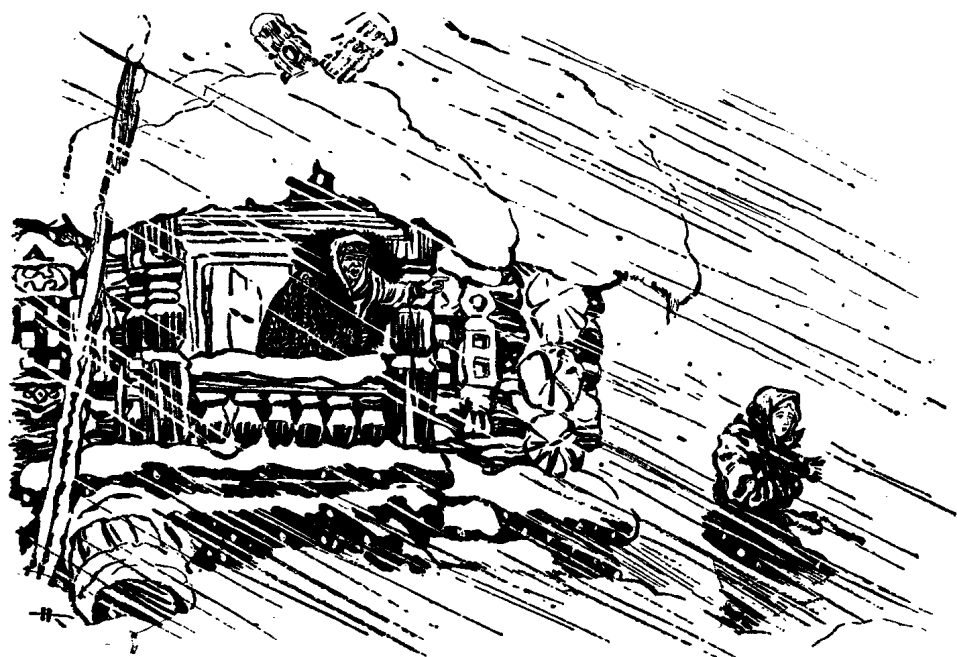
「おまえ、森へシバをとりに行っておいで。」

「でも、家にはこんなにいっぱいシバがあるじゃないの。」とむすめは答えました。

おばあさんはどなりだし、足をふみならしておこり、自分のむすめといっしょにつめよって、ままむすめを小屋^{こや}から外へおしだしてしまいました。

むすめはどうしようもないことがわかった、森にむかって歩いていきました。こおりついた地面^{じめん}がパシパシ音をたて、風はほえ、ふぶきはここぞとばかりにふきあれていきます。

いっぽう、おばあさんとそのむすめは、あたたかい部屋^{へや}のなかを歩きまわって話していました。



「あのいやなむすめはもう帰ってこないよ。
森でここへ死^しんじまうさ！」

ままむすめは森にやってきました。えだのはったモミの木の下までできましたが、それから先どっちへいったらいいのか、どうしたらいいのか、まったくわかりません。

とつぜん、ザワザワ、パシパシという音がきこえて、雪じいさんがモミ林やシラカバ林をとびぬけてやってきました。木から木へとびうつり、ピシリッ、パシリッと音をたてています。そしてモミの木からおりてくるといいました。

「こんにちは、きれいなむすめさん。なんでも、こんな寒^{さむ}さにわしのところへなんかやってきたんだね？」

むすめは自分がきたくてやってきたのではないことなど、なにもかもうちあけました。雪じいさんは、むすめの話をきくといいました。

「きれいなむすめさん、あんたのおっかさんは、シバがほしくてあんたを森によこしたんじゃないよ。だが、わしの森へやってきたんだから、そうだな、あんたのうでまえを見せてもらおう。」

そういつて、すきくずとつむぎ車をむすめにわたしました。

「このすきくずから糸をつむぎ、布を織^ぬって、わしにシャツをぬっておくれ！」

そういうと、雪じいさんはどこかへいつてしまいました。むすめはなにも考えずに、すぐさま仕事^{しごと}にとりかかりました。指^{ゆび}がごごえると、ハアッと息^{いき}をふきかけてはあたため、また仕事^{しごと}をつづけました。こうしてひと晩^{ばん}じゅうねむらずに仕事をしました。なんとかしていいシャツをぬおうと、そのことばかり考えていました。

よく朝、モミの木のあたりで、またザワザワ、パシパシという音がきこえ、雪じいさんがやってきました。そしてシャツを見ると感心^{かんしん}していいいました。

「ほうー、むすめさん、なんとすばらしいできばえじゃ！」

そして、鉄^{てつ}の帯^{おび}のついた大きな長持^{ながもち}をとりだすと、むすめの前においていいいました。

「仕事しごとがよければ、ほうびもよい。」

それから雪じいさんは、むすめにあたたかい毛皮けがわのコートを着きせると、もようのあるプラトーク（カーフ）で頭をつつんでやり、道までおくってくれました。

「さようなら、むすめさん。ここから先は、いい人たちがあんたを助たすけて家までおくってくれるだろう。」

そういうと、消きえてしまいました。

ちょうどそのころ、おじいさんは家に帰かえってきました。そしておばあさんにききました。

「わしのむすめはどこだ？」

「あのむすめは、きのうシバをとりに行ったきり、まだ帰かえってこないんだよ。」

おじいさんは心配しんぱいになり、そのままそりで、森へでかけました。ふと見ると、自分のむすめが道のそばに立たっています。着きかざって、楽しそうなようです。

おじいさんはむすめをそりにのせ、むすめが雪じいさんにもらった長持ながもちも横よこにつみこんで、家へむかいました。

そのころ、悪わるがしこいおばあさんとそのむすめは、テーブルのそばで話わしていました。

「あのむすめは生きてはもどらないよ。とうさんはあのむすめの骨だけ持って帰ってくるよ。」

ピーチカ(どかま)のそばにいた犬がワンワンとほえたあとで、こういいました。

「じいさんのむすめが宝ものを運んでくるよ。ばあさんのむすめはよめにもらいてがない。」

おばあさんは、犬にピロシキ(肉入りパイ)を投げつけ、火かきぼうでなぐりました。

「おだまり、このろくでなし。それより、こうおいしい、『ばあさんのむすめはよめにいく、じいさんのむすめは生きちゃ帰らない。』」

犬はしらん顔でまたつづけました。

「じいさんのむすめが宝ものを運んでくるよ。ばあさんのむすめはよめにもらいてがない。」

そのとき、門がギイーンとなり、小屋の戸が開いて、すてきな毛皮の外とうを着てほおを赤くしたままむすめがはいってきました。むすめのあとからは、たくさんの人たちが雪のようでかざった大きな長持を運んできました。

おばあさんとそのむすめは、長持のところにすっとなぐりていくと、きれいな服をひっぱ

りだし、ながめまわしてはいすの上にならべて、たずねました。

「だから、こんな高いおくりものをもらったんだね。」

そして、雪じいさんからもらったことを知ると、おばあさんは、家じゅうをかけまわって、自分のむすめにたくさんの服ふくを着きせ、あたたかくしてやると、ピロシキの包つつみをむすめの手におしこんで、おじいさんに森につれていくよういしました。

「このこは、こんな長持ながもちをふたつ持もって帰るよ。」

おじいさんは、おばあさんのむすめを森につれてくると、高いモミの木の下にむすめをのこして帰りました。

おばあさんのむすめは、そこに立って、あたりをながめまわし、ぶるぶるふるえては、もんくをいいました。

「どうして雪じいさんはこんなに長いあいだこないのよ。老おいぼれじいさん、どこをうろついているのよ。」

すると、ザワザワ、パシパシという音がきこえ、雪じいさんがモミ林やシラカバ林とびぬけてやってきました。木から木へとびうつり、ピシリッ、パシリッと音をたてています。そして、モミの木からおりてくるといいました。

「きれいなむすめさん。なぜわしのところにきたんじゃね。」

「あんた、知らないとでもいうの。おくりものをもらいにきたんじゃないの。」

雪じいさんはふん、とあざわらっていいました。

「まず、おまえがどんな仕事しごとをするか見せとくれ。わしに手ぶくろを編あむんじゃ……」

そして編あみぼうと毛糸の玉をわたすと、どこかへいってしまいました。

おばあさんのむすめは、編あみぼうを雪のなかに投なげすて、毛糸の玉を足でけつとばすと、いいました。

「まったく、なんてことを思いついたんだろう。老いぼれじい。こんな寒さむさに編あみも
のをするなんて、きいたこともない。指ゆびがこおってしまうじゃないか。」

よく朝、ザワザワ、パシパシという音がきこえて、雪じいさんがやってきました。

「さて、むすめさん。わしのたのんだ仕事しごとを見せとくれ。どんなふうにしあげたかね。」

おばあさんのむすめは雪じいさんにくってかかりました。

「どんな仕事しごとだつて？ 老いぼれじい。それとも、めくらで見えないのかい。おまえ
がくるまでに、わたしはすっかりこごえてやっと生きてるってのに。」

「そうかい、おまえは自分の仕事しごとにつりあったほうびをもらうことじゃろうよ。」と雪

じいさんがいいました。

そしてあごひげをひとふりすると、たちまちすごいふぶきになって、道はみな雪でうまっけてしまいました。そして、雪じいさんは、はじめっからいなかったかのように消えてしまいました。

おばあさんのむすめは、道のない雪野原をさまよい歩き、深い谷間にはいりこんでしまいました。そして雪にうもれてしまいました。

よく朝、やっと明るくなったころ、おばあさんは、おじいさんをつついておこし、むすめをむかえに森へいくよういいました。それから、自分はピロシキを焼^やきはじめました。いすの下にすわっている犬が、ワンワンとほえたあとで、こういいました。

「じいさんのむすめはよめにゆく、ばあさんのむすめは森からもどらない。」

おばあさんは、犬にピロシキを投^なげつけ、火かきぼうでこっぴどくぶちました。

「おだまり、ろくでなし。ピロシキを食^たべてこうおいしい。『ばあさんのむすめが宝^{たから}ものを運^はんでくるよ。じいさんのむすめはよめにもらいでがない。』」

犬はピロシキを食^たべてしまうと、またくりかえしました。

「じいさんのむすめはまもなくよめにいく。ばあさんのむすめは森からもどらない。」

おばあさんはきゆうにあわてでした。

「もしかすると、ほんとうにあのこになにかおこったのかもしれない。帰るとちゆうで宝たからものをなくしてしまったのかもしれない。よし、わたしもじいさんのあとをいってみよう。」

そういうと、毛皮けがわの外とうをはおって、森へかけだしていきました。ふぶきはますます強くなり、ますます高くまきあがりました。そして、すっかり道をうめてしまいました。

おじいさんは森のなかでおばあさんのむすめをさがしましたが、とうとう見つけることができませんでした。家に帰ってみると、おばあさんもいません。そこで近きん所じょの人をあつめ、おばあさんとむすめをさがしにかかりました。さんざんさがしまわり、ふぎだまりをみんなほりかえしてみましたが、やはり見つけることができませんでした。そこでおじいさんは、自分のむすめとふたりでくらししました。春になると、かじ屋やのなかのかじ屋や、元気な若者わかものが結婚けっこんの申しこみをしてきました。

ふたりは結婚けっこん式しきをあげ、いまでもしあわせにくらしていますよ。